

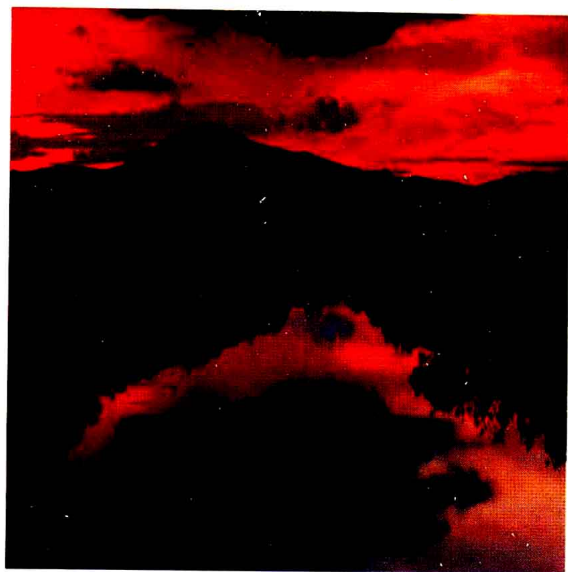
万葉の歌

13

人と風土

中西進企画

桜井 満著



関東南部

保育社

人と風土

中西進企画

国学院大学教授

桜井

満著

万葉の歌

13

関東南部

保育社

万葉の歌一人と風土― ⑬ 関東南部

昭和61年11月20日 印刷 定価 1,400円
昭和61年11月30日 発行

著 者 桜 井 満
発 行 者 今 井 龍 雄
発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚1-1-2

電話 03-944-3581 (代)

印刷/セブン印刷株式会社

用紙/日本加工製紙株式会社

王子製紙株式会社

© 1986 桜井 満

落丁本・乱丁本はお取り
替えいたします

ISBN4-586-70013-0 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN (NDC 910.8)

万葉への旅

『万葉集』には大和中心の風土がある。その中に東歌の巻があり、防人歌を伝える東国は、きわめて特異な位置を占めている。東国には、大和朝廷による律令国家りつりょうこくの形成に果たした役割があり、大和とは違う風土があるからだ。

東歌の世界は、東海道の遠江以東の国々と東山道の信濃以東の国々である。その西の境を結ぶ線は、中部山岳地帯の西境いであつて、ちょうど日本を東西に二分する文化的境界線にあたる。それは人類学的にも考古学的にも認められるところであり、現在でも、たとえば、買った、買ったというような言語的な境界であり、正月などの儀礼食を切餅にするか丸餅にするかというような民俗的な境界にもなっている。

本書はそうした東国の中の「関東南部」篇である。東海道を東へ足柄峠を越えて、相模・武蔵・上総・下総・常陸の五国がその範囲である。足柄の坂における倭建命やまとたけるのみことの「あづまはや」三嘆の伝承によつて説かれるアヅマの地であつて、いわゆる坂東八カ国のうちの東海道沿いの国々である。この地域の歌として明らかかなものはすべてと

りあげた。

大和からアヅマの地を訪れた人びとは少なくないはずであるが、その歌を伝えるのは、都が平城に遷ったあとの山部赤人・高橋虫麻呂・田辺福麻呂の三人だけである。とりわけ虫麻呂は、真間の手児名や筑波山の嬢歌など、土地土地の伝承に耳を傾けて詠みあげた作品を伝える。一方、東歌は、それぞれの土地で生きた人びとの愛や哀しみが、労働や信仰などの生活に即してうたいつがれたものであつた。「みやび」より「ひなび」の歌こそ東歌らしい東歌であり、個の抒情すなわち個人的創作歌より集団の抒情すなわち民俗的歌謡（民謡）こそその根幹を成すものである。

万葉の歌は、万葉びとの生活とその基盤になる歴史や風土を無視して読むことはできない。万葉の歌の風土は単なる点としてみるのではなく、その点と点を結ぶ線を考え、面としてのひろがりを見なければならぬ。すなわち線は地上の道だけでなく、歴史の流れもあり、心の変遷もあるものであり、面は人びとが生活した風土である。

私は眼を閉じて、地底からよみがえってくる万葉びとの生活を見、歌声を聞く心を培って、万葉への旅をしたいと思う。

九月三日 迢空忌に

凡例

- 1 とくに注記する以外、万葉歌（読み下し訳文）の表記は、小島憲之・木下正俊・佐竹昭広著「日本古典文学全集」『萬葉集』（一）（四）（小学館刊）による。
- 2 引用歌の表記が小学館版『萬葉集』と異なる場合は、（一）内に著者の考えにもとづく表記を記す。
- 3 日本年号は『日本書紀』による。

装 丁 日本デザインセンター

題 字 戎家契雲

写 真 小原直久・清原和義・桜井 満

地 図 藤立育弘

資料提供 東京国立博物館・埼玉県立さきたま資料館・

茨城県立歴史館・鎌倉市教育委員会・

市川市・柏書房

目次

口絵 関東南部うたどころ

一、相模の歌

足柄のみ坂 4

東路のはて 4 あづまはや 6 アヅマの国 9 足柄峠の神

12 足柄のみ坂給はり 16 行路死者を悼む 17

相模の山と海 21

東歌概説 21 足柄のみ坂恐み 24 マツシダス 27 足柄小舟

28 ヨニモタヨラニ 31 菅枕と花つ妻と 32 花さし遊び 34

足柄山の歌垣 36 鎌倉の歌 39 相模嶺 42 余綾の浜 45

大君の命恐み―相模の防人歌 46

防人歌概説 46 大君の命恐み 49 舟飾り 52

二、武蔵の歌

埼玉の津 55

小崎沼・埼玉の津 55 高橋虫麻呂 58 石ぶみの呪縛 60 稻荷

山鉄剣の銘文 62 北武蔵と南武蔵 64 東山道から東海道へ

66 武蔵野のうけらが花 69

多摩川にさらす手作り 69 ウケラとオケラと 73 武蔵野のうけら

が花 74 かた焼き・をぐきなど 79 入間道のオホヤが原 81
多摩の横山―武蔵の防人歌 84

夫婦唱和の歌 84 妻の嘆き 86 防人の嘆き 88

三、上総の歌

須恵の珠名 90

房総三国 90 東漸の文化 92 須恵の珠名 95 虫麻呂東国歌の

製作年代 97

東歌と防人歌と 98

船泊りの鎮魂歌 98 馬来田の嶺ろ 100 父と子の歌 102 足羽の

神に小柴さし 103

四、下総の歌

葛飾の真間 107

海神への手向 107 シラ浜とメラと 110

真間の手児名 付、防人歌 113

赤人の作 113 虫麻呂の詠 115 東歌の四首 118 葛飾早稲 119

防人の歌 121

五、常陸の歌

二並ぶ筑波の山 125

九〇

一〇七

一二五

ころもで常陸の国 125 東女をあづまを 128 虫麻呂の筑波讀歌 130
 西に富士、東に筑波 134 筑波山に登る 135 曝井・手綱の浜 139
 筑波嶺の耀歌 140

かがふ耀歌に 140 苗族の歌垣ミヤコ 145 壮族の歌垣チウワン 146 沖繩・奄
 美の民俗 148 モハキツ考 150 モハキツ五説 153 春と秋の祭り
 157 掛け合いの歌 161 カガヒの歌 163 耀歌の山 166
 鹿島の神に祈る―常陸の防人歌 169

常陸さし行かむ雁もが 169 万代に記し継ぐ 173 筑波山に寄せる
 174 久慈川に寄せる 176 鹿島の神を祈りつつ 177 鹿島神郡 180
 霰降り鹿島の神 181 浪逆の海 183 刈野の橋 184 豊香島の宮
 186 武甕槌神 188 鹿島立ちの祭り 190 鎌足鹿島出生説 192
 春日の神へ 194

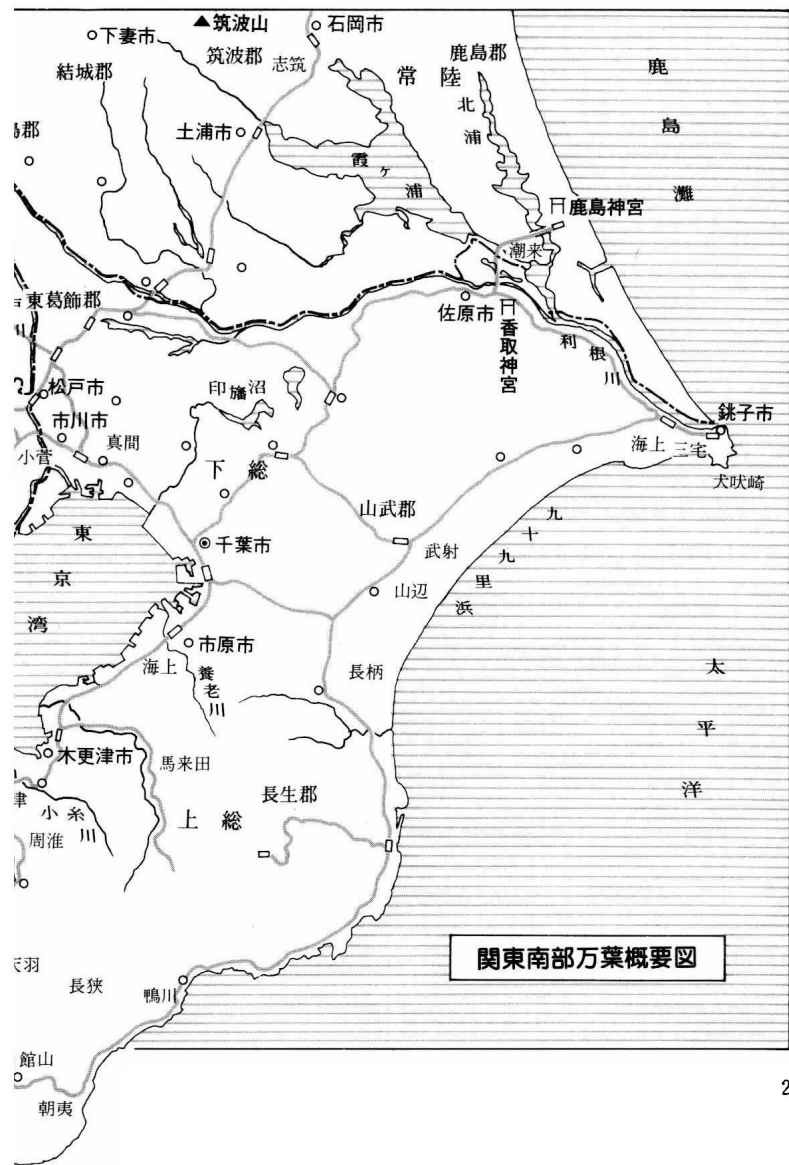
参考文献 200

万葉地名案内 202

この本に載った歌の索引 223

万葉の歌―人と風土―

13 関東南部



一、相模の歌

足柄のみ坂

東路のはて

足柄峠あしがらは東海道最大の境であり、最高の難所であつた。駿河するがと相模さがみの国境いである以上に、大和から東海道を下つてきて、この足柄峠を越えるといよいよ東路あすまじのはてのアヅマの地に足を踏み入れるという実感があつたのだ。アヅマの門戸かどをなす峠であつた。それだけに格別いふに畏怖いふすべき峠の神のいますところと信じられ、「鶏とりが鳴く東の国の恐かしこみや神のみ坂」(巻九「八〇〇」)とうたわれ、「足柄のみ坂」と畏敬いけいされたのであつた。

巻七の羈旅きりよの歌群に次の一首がある。



足柄より富士を望む

足柄の 箱根飛び越え 行く鶴の ともしき見れば 大和し思ほゆ

(巻七・二七五)

大和からはるばる東海道を下ってきたのである。田子の浦を通り薩埵峠を越えて、眼前に白雪をいただいた富嶽を望んで感嘆の声をあげ、これぞ「神さびて高く貴き 駿河なる富士の高嶺」(巻三・三七)——まことに「日本の大和の国の鎮めともいいます神かも 宝ともなれる山かも」(同三・一九)といった思いをいだきながら、海沿いの道をたどり、「長倉駅」すなわち三島市の北西に接する長泉町あたりから黄瀬川に沿って北上し、「横走駅」はどこか未詳ながら、駿東郡小山町竹之

下あたりから、富士を背にして、足柄のみ坂への登りにかかったのである。峠に立つて来し方をふり返り、行く末を望み、峠の神に手向をしたことであろう。これから続く山坂を思うと、箱根の山を西へ飛び越えて行く鶴がうらやましくなる。大和のふるさとがしのばれてならないのだ。大和からの旅びとは、長い旅路のはてにこの足柄のみ坂に立って、いよいよアヅマか、と感慨に涙をにじませたことであろう。旅の無事

を折つて峠の神に手向けながら望郷の念にかられるのであった。

それはアヅマの国から西へ越えて行く場合も同じだ。上総国の政情を太政官に報告する朝集使大原真人今城が上京するときに、郡司の妻女らのはなむけの歌に、

足柄の 八重山越えて いましなば 誰をか君と 見つつ俣はむ

(巻二十四四〇)

と詠まれている。今城はなかなかのみやび男だったのであろう。あなたさまがおいでになつてしまったなら、誰をあなたとみてお慕いしましょう——、という。送別の宴の歌であろうが、ほかに変るべき人はいないというのである。京から赴任している今城が上京するのに、京に行つてしまったなら、といわずに、「足柄の八重山越えていましなば」と表現していることは見のがせない。上総から上京するためには、たしかに足柄峠を越えて行くのであるが、足柄峠を越えたと、八重山越えた遠いところと感じていたのだ。足柄峠はアヅマの出入口の峠だったのである。

あづまはや

アヅマの名の起こりは、ヤマトタケルに寄せて伝えられる。『古事記』によると、東方の荒ぶる蝦夷を平定して帰還の途についた倭建命は、

足柄の坂本に到りて、御糧食す処に、その坂の神、白き鹿に化りて来立ちき。しかしてすなはち、その咋ひ遺したまへる蒜の片端もちて、待ち打ちたまへば、その目に中るすなはち打ち殺さえき。かれ、その坂に登り立ちて、三たび嘆かして、

「あづまはや」